

教皇フランシスコ：  
被爆地からの発信

2020年2月 REC-PP-09

**RECNA**  
**Policy Paper**

レクナ ポリシーペーパー



Research Center for  
Nuclear Weapons Abolition,  
Nagasaki University(RECNA)

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA)

# 教皇フランシスコ： 被爆地からの発信

2020年2月 REC-PP-09

吉田 文彦	センター長・教授
広瀬 訓	副センター長・教授
山口 響	客員研究員
四條 知恵	長崎大学多文化社会学部客員研究員

※本稿で述べている見解は、筆者個人のものであり、筆者が属する組織を代表するものではありません。



提供：長崎市

核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる場所で、数え切れないほどの人が熱望していることです。この理想を実現するには、すべての人の参加が必要です。個々人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核兵器の脅威に対しては、一致団結して具体性をもって応じなくてはなりません。

核兵器についてのメッセージ

長崎・爆心地公園

2019年11月24日

出典：カトリック中央協議会ホームページ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19818/>

## はじめに

世界が常に、トップダウンで動くわけでも変わるわけでもない。ボトムアップ型の変革が歴史に新たな一ページを加えることは少なくないし、民主的な社会では、むしろそれが望ましい場合も多いだろう。それでも、リーダーの言葉、行動が時代の動向を大きく左右するケースも私たちは過去にたくさん見てきた。1989 年秋には、リーダーの判断がボトムアップの力を誘発し、市民の爆発的なパワーでベルリンの壁を打ち壊した。

あれから 30 年余りがたった 2020 年 1 月 7 日の新聞広告。宝島社のその大型広告にはベルリンの壁を克服した市民たちの姿が大きな写真で示され、写真の両脇にはこんなメッセージが載せられていた。「ハンマーを持って。バカがまた壁をつくっている」。これを読んだとき、核廃絶をめざす私たちにも、核の壁を打ち壊していくハンマーが必要であり、できるだけ多くの人がそれを手にすることが肝要なのだと考えさせられた。

冷戦の最前線であり冷戦を象徴する存在でもあったベルリンの壁崩壊が 30 周年を迎えてから程ない今年の晩秋に、ローマ・カトリック教の指導者であるフランシスコ教皇が長崎、広島の前で被爆地を歴訪し、核廃絶の必要性を力強い言葉でアピールした。教皇のメッセージをハンマーに例えるのは不遜かも知れないが、新聞広告を目にした時、あの力強いメッセージは核の壁に打ち下ろされたハンマーだったのではないかと思った。一人ひとりが握りしめるべきハンマー、すなわち核廃絶への信念と行動力を、身をもって示されたのではないかと。

私のこんな感想は個人的なものとして横に置くとして——専門的な観点からみた時に、フランシスコ教皇の今回の被爆地訪問の意義とは何なのか。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は、核軍縮に関する意義、日本の核兵器政策に与える含意、さらには、長崎のカトリック教会における教皇来訪の影響に関する論文を収録した本ポリシーペーパーをまとめることにした。

歴史的な教皇訪問が長崎でのボトムアップの力をさらに誘発し、長崎が核の壁を打ち壊していく拠点であり続けることが大切だ。その試みに少しでもここでの論考が役立てばと願っている。

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）

センター長・教授 吉田 文彦

## 目 次

はじめに . . .	吉田 文彦	
1. ローマ教皇フランシスコの被爆地訪問と核軍縮 . . .	広瀬 訓	1
2. フランシスコと安倍——対立する原爆・核兵器認識 . . .	山口 響	8
3. 長崎のカトリック教会における教皇フランシスコ来訪の影響 . . .	四條 知恵	13
付録		
日本訪問前のビデオメッセージ . . .		19
教皇のスピーチ 核兵器についてのメッセージ 長崎・爆心地公園 (2019年11月24日) . . .		20
教皇のスピーチ 平和記念公園にて (2019年11月24日) . . .		23
教皇のスピーチ 政府および外交団との懇談 (2019年11月25日) . . .		26
ローマ教皇フランシスコ台下との会談等 (2019年11月25日) . . .		29
—		
筆者紹介		32

## ローマ教皇フランシスコの被爆地訪問と核軍縮

広瀬 訓

### 1. 教皇による被爆地訪問の意味

2019年11月24日、ローマ教皇として38年ぶりに長崎を訪れたフランシスコ教皇は、長崎市内の爆心地公園で核兵器廃絶へ向けてのメッセージを発信した。フランシスコ教皇は核軍縮に極めて熱心でこれまでも度々核軍縮の推進を訴えるメッセージを発信してきただけでなく、ジョー・オダネル氏が撮影した「焼き場に立つ少年」の写真の配布を世界中のカトリック教会で行うなど、核軍縮に関し非常に積極的であることで知られている。今回の日本訪問に際しても、わざわざ厳しい日程の中で長崎、広島と二つの被爆地を訪れ、メッセージを発している。これは間違いなく今回の訪日の主な目的の一つが「被爆地から世界に核軍縮を訴える」ことにあった事実を示すものである。

フランシスコ教皇は、ローマ・カトリック教の指導者として、世界でも最大規模の信者を抱える宗教的、倫理的、道徳的なリーダーとして大きな権威と影響力を持っている。しかし同時にローマ・カトリック教の教皇はバチカン市国の国家元首として、政治的な役割をも担っているのである。ここでは、今回のフランシスコ教皇の被爆地訪問と、そこで発せられたメッセージを中心にローマ教皇が国際的な核軍縮・不拡散の動きにどのような影響を与えうるのかという問題を概観してみたい。

### 2. バチカン市国と国際政治

バチカン市国はしばしば「世界最小の国」と呼ばれており、通常であればマイクロステートにも該当しない規模の小さな「国」である<sup>1</sup>。当然のことながら、軍事力や経済力という点では他の国とは比べることができない。それでは「極小国」としてその影響力は無視できるのかといえば、なかなか難しい問題である。もし無視するというのであれば、そもそもローマ教皇の訪問やメッセージはカトリック信者以外にはあまり注目される理由はなく、大きなニュースとして報じられる価値は無いはずである。しかし、実際にはローマ教皇の動向や発言は国際的にも広く報道されている<sup>2</sup>。それにもかかわらず、実際にバチカン市国が国際社会においてどのような影響力を持っているかという点については、十分に検討されてきているとは言えないだろう<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> 人口は615人（2018年10月）（バチカン国籍保有者（615人）とバチカン国籍を保有せずバチカン市国に居住する者（205人）の合計は820人）で面積は約0.44平方キロメートル（日本の皇居は約1.15平方キロメートル）、出典：外務省 バチカン基礎データ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vatican/data.html>

<sup>2</sup> 今回のフランシスコ教皇の訪日に関しては、New York Times や Washington Post と言った米国の主要紙も記事を掲載している。

<sup>3</sup> 松本佐保 『バチカンと国際政治 宗教と国際機構の交錯』 千倉書房 2019 p.17-p.18

バチカン市国の国際的な影響力を把握しにくい大きな理由は、バチカン市国が持つ影響力が、「軍事力」や「経済力」といった「目に見えやすい」あるいは数値として比較しやすいものではないからである。バチカン市国の持つ影響力とは、世界中で13億人といわれているカトリック信者と多数の教会によって構築されている人的なネットワークを基盤としている。もちろんカトリック教会を通して信者に発信される様々なメッセージは信者たちに影響をあたえるであろうし、国内に多数のカトリック教徒を抱える国々においてはその影響力は無視することはできない。

しかし、バチカン市国の持つ潜在力は、カトリック教徒に対する宗教的な影響力には止まらない。多くの国がバチカン市国の動向に注意を払っているのは、バチカン市国の持つ情報収集能力に注目しているからという側面がある。世界中に散らばっている信者および教会に集まる情報量は膨大なものになると考えられる<sup>4</sup>。それだけでなく、カトリック傘下の各国の大学や研究所の中には世界的に有名な施設や、著名なスタッフを抱えている所も少なくない。それらの施設の持つ専門的な知識の総体は膨大なものであろう。そのような情報や知識の蓄積を持つバチカン市国のトップであるローマ教皇は、単なる宗教的な指導者であるだけでなく、豊富な情報と専門的なアドバイスに基づく提言を行う国際的な政治指導者としてもしばしば注目されるのである<sup>5</sup>。

### 3. バチカン市国と核軍縮

歴代のローマ教皇が核軍縮・不拡散の問題に関し、どのような立場を取ってきたのかは、昨年刊行された *Christopher Hrynkow* “Nothing but a False Sense of Security”: Mapping and Critically Assessing Papal Support for a World Free from Nuclear Weapons’ *Journal for Peace and Nuclear Disarmament* Volume 2 Issue 1, 2019 に詳しい。Hrynkow によれば、歴代のローマ教皇は、濃淡はあれ、いずれも核兵器については批判的もしくは否定的であり、核兵器に反対する立場は決してフランシスコ教皇に始まったことではないと結論づけられている。

驚くべきことに、ピウス XII 世（教皇在位 1939–1958）が、初めて核技術の利用についてそれが神と聖書の教えに沿うものでなくてはならないと指摘したのはなんと 1941 年であり<sup>6</sup>、1943 年には核分裂によるエネルギーを爆発の形で利用することに対し、明確に反対する声明を発している<sup>7</sup>。つまり、ピウス XII 世が初めて核エネルギーの軍事利用に懸念を

---

<sup>4</sup> 西日本新聞 「「核二度と」長崎から発信 「憧れの地」世界平和を説く」 2019年11月23日

<sup>5</sup> 松本 p.248-p.251

<sup>6</sup> God the Only Commander and Legislator of the Universe, Address to the Plenary Session of the Academy, the Pontifical Academy of Science, 30 November 1941  
<http://www.academyofsciences.va/content/accademia/en/magisterium/piusxii/30november1941.html>

<sup>7</sup> The Laws that Govern the World, Address to the Plenary Session of the Academy, the Pontifical Academy of Science, 21 February 1943

示したのは、当時原爆の開発で先行していたイギリスが、ウランの核分裂を利用した爆弾の製造が可能であるという専門家による委員会の報告を受けて、原爆の開発へ向けて「チューブ・アロイス」計画を開始したわずか一か月後のことである。また、具体的に核分裂を利用した爆発物の製造に反対するメッセージを発したのは、米国のマンハッタン計画が本格的に開始されたわずか数か月後である。もちろんピウス XII 世は核物理学の専門家などではない。しかし、ピウス XII 世はおそらくバチカン市国の有する巨大な人的ネットワークを通し、核分裂エネルギーの持つ潜在的な可能性と、各国の動きについてかなりの知識と情報を得ており、懸念を感じていたのだろう。残念ながらこのピウス XII 世の警告は実を結ぶことはなかったし、そもそも広島、長崎への原爆投下により原子爆弾という想像を絶する新兵器の存在とその威力が明らかになるまで、このピウス XII 世の発言の意味するところは多くの人々には理解されず、発表当初は注目されることもなかったのではないかと思われる。ただ、広島、長崎で原爆という核分裂エネルギーを放出する兵器が実際に使用された後から振り返ってみると、このピウス XII 世の懸念と警告が、いかに時代を先取りし、的確なものであったかということがよくわかる。これはバチカン市国の持つ情報収集能力の高さに支えられたローマ教皇の国際的な発言力の一端を示すものである。もちろんピウス XII 世は広島・長崎への原爆投下後も、その恐ろしさを指摘し<sup>8</sup>、さらに核実験の危険性を訴えるなど<sup>9</sup>、核軍縮について極めて積極的な発言を繰り返した。

また、ヨハネ XXIII 世（在位 1958－1963）はキューバミサイル危機に際し、米国のケネディ大統領とソ連のフルシチョフ首相に対し平和的な解決を提案し<sup>10</sup>、パウロ VI 世（在位 1963－1978）は米ソ間の核抑止を「恐怖を平和という名で隠そうとするもの」として厳しく批判した<sup>11</sup>。そしてヨハネ・パウロ II 世（在位 1978－2005）は、ローマ教皇として初めて被爆地を訪問し、原爆投下は「人間のしわざ」という有名な一節を明らかにし<sup>12</sup>、核兵器

---

<http://www.academyofsciences.va/content/accademia/en/magisterium/piusxii/21february1943.html>

<sup>8</sup> RADIOMESSAGGIO DI SUA SANTITÀ PIO XII A TUTTO IL MONDO IN OCCASIONE DEL NATALE, 24 December 1955

[https://w2.vatican.va/content/pius-xii/it/speeches/1955/documents/hf\\_p-xii\\_spe\\_19551224\\_cuore-aperto.html](https://w2.vatican.va/content/pius-xii/it/speeches/1955/documents/hf_p-xii_spe_19551224_cuore-aperto.html)

<sup>9</sup> Ibid.

<sup>10</sup> Christopher Hrynkow “‘Nothing but a False Sense of Security’: Mapping and Critically Assessing Papal Support for a World Free from Nuclear Weapons’ *Journal for Peace and Nuclear Disarmament* Volume 2 Issue 1, 2019, p.58

松本 p.154-p.155

<sup>11</sup> MESSAGE OF HIS HOLINESS POPE PAUL VI FOR THE CELEBRATION OF THE DAY OF PEACE, 1 January 1975

[http://w2.vatican.va/content/paul-vi/en/messages/peace/documents/hf\\_p-vi\\_mes\\_19741208\\_viii-world-day-for-peace.html](http://w2.vatican.va/content/paul-vi/en/messages/peace/documents/hf_p-vi_mes_19741208_viii-world-day-for-peace.html)

<sup>12</sup> 広島平和記念資料館にはその石碑が建立されている。



を含む大量破壊兵器を保有することは人間性と神に対する責任に背くものであるとした<sup>13</sup>。さらにヨハネ・パウロII世は核爆発によって引き起こされる結果の科学的な調査を実施し、その重大な結果に対し、先進諸国といえども適切に対応することは不可能であるとして、各国に核兵器の危険性を訴える使節団を派遣した<sup>14</sup>。これはまさしく2013年から2014年にかけて、3回にわたって開催された核兵器の人的影響に関する国際会議のテーマとも一致するものであり、この点においても、バチカン市国の方針は国際社会における核兵器の使用による人道的な結末の議論を先取りするものであった。

このように、核エネルギーの実用化がまだ理論の段階であった時点から、歴代のローマ教皇は、国際社会の流れを先取りするように、核兵器の問題について極めて先進的な懸念や警告を表明し続けてきたのである。それが果たして現実に国際政治においてどの程度の影響を及ぼしてきたのか、つまり核軍縮・不拡散に具体的に貢献する部分があったのかどうかについては、把握することは難しい。しかし、これだけ時宜を得た、あるいは先見の明があったと言わざるを得ない発言を繰り返す歴代のローマ教皇に対し、実は各国がその発言に相当の注意を払っていることは十分に考えられることである。

#### 4. 教皇フランシスコの熱意

フランシスコ教皇は、2017年にジョー・オダネル氏が長崎で撮影したとされる「焼き場に立つ少年」の写真に、写真の解説と「戦争がもたらすもの」という自身のメッセージを加えて世界中のカトリック教会で配布するなど<sup>15</sup>、核兵器廃絶へ向けて積極的に取り組む姿勢を見せ続けている。また、フランシスコ教皇は、2014年にウィーンで開催された第3回核兵器の人的影響に関する国際会議において、核兵器は大量殺りく兵器であり、核抑止は人道また倫理上正当化できないというだけでなく、現実に核兵器の開発、製造、維持に巨額の資金と資源が消費されている点も指摘し、核兵器の存在は現在世界中で低開発や貧困に苦しんでいる人々の状況を改善する妨げともなっていると厳しく批判している<sup>16</sup>。

さらにフランシスコ教皇は、核兵器を倫理的に非難するだけでなく、道徳的、法的にも許容できるものではないとの立場を明らかにしている<sup>17</sup>。フランシスコ教皇は、核抑止に基づ

---

<sup>13</sup>MESSAGE OF HIS HOLINESS POPE JOHN PAUL II FOR THE CELEBRATION OF THE WORLD DAY OF PEACE, PEACE IS A VALUE WITH NO FRONTIERS NORTH-SOUTH, EAST-WEST: ONLY ONE PEACE, 1 January 1986  
[http://w2.vatican.va/content/john-paul-ii/en/messages/peace/documents/hf\\_jp-ii\\_mes\\_19851208\\_xix-world-day-for-peace.html](http://w2.vatican.va/content/john-paul-ii/en/messages/peace/documents/hf_jp-ii_mes_19851208_xix-world-day-for-peace.html)

<sup>14</sup> Hrynkow, P.65

<sup>15</sup> フランシスコ教皇は、実質3日間という短い日本滞在の間に上智大学を訪問し、展示されている「焼き場に立つ少年」のオリジナルプリントを見ている。

<sup>16</sup> [https://w2.vatican.va/content/francesco/en/messages/pont-messages/2014/documents/papa-francesco\\_20141207\\_messaggio-conferenza-vienna-nucleare.html](https://w2.vatican.va/content/francesco/en/messages/pont-messages/2014/documents/papa-francesco_20141207_messaggio-conferenza-vienna-nucleare.html)

<sup>17</sup> Statement by H.E. Archbishop Ivan JurkoviE, Permanent Observer of the Holy See

く安全保障は「虚構」(False) であるという見解を繰り返し強調し、核兵器に頼らない世界の平和と安全保障を追求する必要性も指摘している<sup>18</sup>。このようなフランシスコ教皇の指導の下、バチカン市国は核兵器の人的影響に関する国際会議に積極的に参加しただけでなく、国連における核兵器禁止条約交渉の推進を支持し、核兵器禁止条約が国連総会において採択されると、いち早く署名、調印し、核兵器の廃絶へ向けて国際世論をリードしようとする姿勢を示している。

2019年の、ローマ教皇としての38年ぶりの日本訪問は、フランシスコ教皇の核兵器廃絶にかける熱意の一端が表れたものということもできるだろう<sup>19</sup>。フランシスコ教皇の日本でのスケジュールを見ると、長崎、広島という二つの被爆地への訪問が目を惹く。カトリック教会の総帥として、東京と日本でのカトリックの中心といってもよい長崎でミサを行うことは自然であろうが、長崎だけではなく、わざわざ広島でも爆心地を訪れ、メッセージを発していることは、フランシスコ教皇の今回の日本訪問が、宗教的な目的だけでなく、核軍縮の推進を訴えるという強い意図を持って計画されたものであることを示すものである<sup>20</sup>。おそらく、2020年の広島・長崎への原爆投下75年、核不拡散条約(NPT)発効50年および無期限延長25年にあたる再検討会議など、いわゆる「節目の年」を目前にして、米ロ中の核兵器国間の軋轢の激化、米ロ間の中距離核戦力(INF)全廃条約の破棄、北朝鮮による核保有、イランによる核開発疑惑など、2009年に米国のオバマ大統領が「核兵器のない世界」に比べると、わずか10年あまりの間に核軍縮をめぐる世界の動きが大きく逆行している状況に対し、フランシスコ教皇は核軍縮を強く訴える必要性を感じての被爆地訪問であったことが見て取れる<sup>21</sup>。

今回の訪日に際し、フランシスコ教皇は事前に日本の人々に対しビデオメッセージを発

---

to the United Nations and Other International Organizations in Geneva at the  
Second Preparatory Committee of the 2020 Review Conference of the Treaty on the Non-Proliferation of  
Nuclear Weapons, Geneva, 23 April 2018

[http://statements.unmeetings.org/media2/18559134/holy-sea-printer\\_20180423\\_101339.pdf](http://statements.unmeetings.org/media2/18559134/holy-sea-printer_20180423_101339.pdf)

<sup>18</sup> MESSAGE OF HIS HOLINESS POPE FRANCIS TO THE UNITED NATIONS CONFERENCE  
TO NEGOTIATE A LEGALLY BINDING INSTRUMENT TO PROHIBIT NUCLEAR WEAPONS,  
LEADING TOWARDS THEIR TOTAL ELIMINATION, New York, 27-31 March 2017

[https://w2.vatican.va/content/francesco/en/messages/pont-messages/2017/documents/papa-francesco\\_20170323\\_messaggio-onu.pdf](https://w2.vatican.va/content/francesco/en/messages/pont-messages/2017/documents/papa-francesco_20170323_messaggio-onu.pdf)

<sup>19</sup> 1981年にローマ教皇として初めて日本を訪問したヨハネ・パウロII世も広島、長崎の二つの被爆地を訪問し、核兵器に反対するメッセージを発しており、ローマ教皇の日本訪問には一貫して核兵器に反対する姿勢が反映されていると言ってもよい。

<sup>20</sup> フランシスコ教皇は長崎よりもむしろ広島の方が宗教的な背景無しで原爆の悲劇をより強く感じる事ができた旨の感想を帰国の途上で述べている。

[http://www.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco\\_20191126\\_voloritorno-giappone.html](http://www.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco_20191126_voloritorno-giappone.html)

<sup>21</sup> 西日本新聞 「「核二度と」長崎から発信 「憧れの地」世界平和を説く」 2019年11月23日

し、その中でも核兵器の使用が倫理に反することと、本当の平和の重要性を強調している<sup>22</sup>。予想された通り、フランシスコ教皇は2019年11月24日の長崎・爆心地公園でのメッセージにおいて、核兵器や大量破壊兵器は平和と安定をもたらすものではなく、「恐怖と相互不信を土台とした偽りの確かさの上に平和と安全を築き、確かなものにしよう」とするものだとその論理矛盾と偽善性を厳しく批判している。また、核兵器の使用によりもたらされる悲惨さだけでなく、軍備を製造、保有することは貴重な資源の浪費であり、核兵器の保有自体も「神に歯向かうテロ行為」という激しい言葉で弾劾し、核兵器禁止条約を含む核軍縮に関する国際法に従って行動することは「神に対する、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務」であるとまで述べている<sup>23</sup>。さらに広島平和記念公園では、戦争に原子力を使うことは「犯罪」であり、「核兵器の保有は、それ自体が倫理に反して」といって端的に述べている<sup>24</sup>。

このようにフランシスコ教皇は今回の日本訪問でも、従来の核兵器に対する厳しい姿勢を変えることなく、核軍縮の促進を訴えた。そのうえ、日本からの帰国の途上、機中において核兵器の使用および保有は道徳に反する旨を「カトリック教会のカテキズム」<sup>25</sup>に含めなければいけないと発言した<sup>26</sup>。これはフランシスコ教皇が核兵器についてカテキズムの改訂を意図しており<sup>27</sup>、いずれ核兵器の使用および保有はカトリック教会の教義に照らして許容できない旨、カトリックの信仰と教理の体系の一部として世界中のカトリック教会とその信徒に伝えられることを意味する。それが今回のフランシスコ教皇による日本訪問の、いわば「総まとめ」としてその帰路に確認されたことの意義は大きい。

---

<sup>22</sup>ローマ教皇フランシスコ ビデオメッセージ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/18/19750/>

<sup>23</sup>教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 核兵器についてのメッセージ 長崎・爆心地公園 2019年11月24日

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19818/>

<sup>24</sup>教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 平和記念公園にて 2019年11月24日、広島

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19823/>

<sup>25</sup>カトリック教会のカテキズムは「教皇任命による教皇庁諸庁の要員からなる委員によって編纂された「使徒継承の信仰に関する新しい権威ある解説書」(教皇使徒的書簡「大きな喜びをもって」)です。聖職者や修道者ばかりでなく一般信徒にとっても、信仰生活の助けとなるテキストとして「カトリックの信仰と教理とが誠実に体系的にまとめられ」(同前)ています」カトリック中央協議会

<https://www.cbcj.catholic.jp/publish/cate/>

<sup>26</sup> PRESS CONFERENCE ON THE RETURN FLIGHT TO ROME, Papal flight, Tuesday, 26 November 2019

[http://www.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco\\_20191126\\_voloritorno-giappone.html](http://www.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco_20191126_voloritorno-giappone.html)

<sup>27</sup>カトリック教会のカテキズムは、2018年8月2日に死刑を容認しないという改訂が行われており、同様の改訂が行われるものと予想される。

<https://www.cbcj.catholic.jp/2018/08/03/17370/>

## 5. 教皇フランシスコの影響はあるのか

フランシスコ教皇は今回の日本訪問で、安倍総理大臣をはじめ、何人かの政府首脳とも会っており、その際にも戦争被爆を体験した国として、日本が核兵器ではなく対話による紛争の解決と平和のために役割を果たすことを期待している旨の発言をした<sup>28</sup>。当然というか、残念ながらこれにより日本政府が従来 of 米国の提供する核抑止に依存する安全保障政策を見直すことはないだろう。ある意味ではそれが国家元首としてのローマ教皇の持つ直接的な影響力の限界である。

しかし、長期的にみた影響を予測することは難しい。言うまでもなくフランシスコ教皇の指導の下、核兵器はカトリックの信仰や教理とは相容れず、教会の教えとして核兵器を否定するという考え方がカトリック教徒の間に浸透すれば、多くのカトリック教徒人口を抱える国の政策に一定の影響を与えることは考えられるだろう。ただし、それが果たして主要国の外交安全保障政策に変更を促すレベルまで拡大するかどうかはわからない。

また、ローマ教皇という倫理的、道徳的な後ろ盾を得て、核兵器禁止条約への批准を躊躇っているような国が、国民の説得に成功するようなケースも考えられるかもしれない。そして何よりも「核兵器の使用は倫理・道徳に反する」「核兵器は保有するだけで倫理・道徳に反する」という意識が広がることは、核兵器の使用に対する敷居を高くすることは間違いないだろう。ローマ教皇という、世界でも最も有力な宗教指導者を政治的に批判することは容易ではなく、ローマ教皇と公然と敵対するような言動は回避したいと考える各国の指導者も少なくないはずである。そのようなローマ教皇が繰り返し国際社会に対して核軍縮を訴える意味は、バチカン市国が国際社会で持っている特殊な影響力も併せて、長期的に見た場合、決して小さくはないと期待することも可能であり、今後核軍縮の促進を求める人々にとって、大きな追い風となると言えるだろう。

---

<sup>28</sup> 教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 政府および外交団との懇談 2019年11月25日、首相官邸大ホール <https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/26/19849/>

## フランシスコと安倍——対立する原爆・核兵器認識

山口 響

ローマ教皇フランシスコは、2019年11月23日から26日までの来日日程の中で、長崎だけを訪問したのではない。核軍縮の観点から今回の教皇来日の持つ意味を検討する本ポリシーペーパーにとって一つの焦点となるのは、教皇と安倍晋三首相の会談、および、教皇と日本政府要人・外交団との集いにおいて、日本政府によって教皇来日がどのようなものとして受け止められ、どのようなものとして国民の前に提示されたのか、ということであろう。

広瀬論文が教皇来日を国際政治のより大きな文脈の中で、四條論文が長崎のローカルな歴史の文脈の中で分析しているとすれば、本稿はその中間、すなわち、教皇来日が日本の核兵器政策に与える含意と日本政府側からの対応について検討することを目的とする。

### 1. バチカン市国と日本——核兵器禁止条約をめぐる

広瀬論文でも指摘されているように、ローマ教皇を国家元首とするバチカン市国と日本とは、2017年に採択された核兵器禁止条約に対する見解が180度異なっている。バチカン市国が、同条約が署名開放された2017年9月20日に条約を即日、署名・批准したのに対し、日本政府は批准に対して否定的だ。

フランシスコ教皇が長崎・広島を訪問する日程が組まれており、さらには、原爆投下後の長崎で撮影されたとされる「焼き場に立つ少年」の写真を配布するようフランシスコが指示するなどの行動があったことからすれば、教皇が被爆地で核兵器廃絶への強力なメッセージを世界に発することは既定路線であった。日本政府は、教皇来日を全体としては歓迎しつつも、来日のプロセスの中で、自らが核廃絶に対して消極的であるとの印象が生まれる可能性を警戒したに違いない。報道によれば、ある政府関係者は、教皇の被爆地でのメッセージについて「アドリブも多用される上に、どんなメッセージを発するか分からないので懸念はある」と語ったという<sup>1</sup>。

日本政府にとってのプライオリティは、ローマ教皇と日本政府の核兵器に対する態度の違いを顕在化させず、両者が核廃絶という同じ目標に向かっているとの印象を一般市民に対して作り出すことにあったのではないか。その目的のために使われたのが、日本政府要人・外交団が教皇を迎えて11月25日夕刻に開催した集いにおける、安倍首相の発言である<sup>2</sup>。

### 2. 安倍発言を読み解く

---

<sup>1</sup> 『朝日新聞』2019年11月22日。

<sup>2</sup> 本ポリシーペーパー29-31ページに発言の全文。

ここで安倍首相は、長崎原爆の爆心地としての「浦上」というワードを出している。長崎以外ではほとんど知られていないであろうこの地名に日本の首相が言及すること自体、かなり異例のことだが、それは意図的に取られた選択であったと思われる。どういうことか。

安倍発言は、教皇来日に対する冒頭での形式的な謝辞に続き、2014年1月15日にフランシスコがバチカンでの演説で触れたという、いわゆる「信徒発見」に言及している。「信徒発見」とは、日本が西洋諸国に対して開国したものの、依然として民衆に対してはキリスト教信仰が禁止されていた幕末の1865年に起こった出来事である。長崎の外国人居留地にフランスが建設した大浦天主堂を浦上の隠れキリシタンが密かに訪問し、教会のプチジャン神父が日本にもキリシタンが存在することを確信したという、日本の禁教史において画期を成す事件である。

安倍首相は、「信徒発見」に先だって長いキリスト教迫害の時代が続いたことに触れたのち、突如として、「しかしながら、歴史とは、苛烈ではありませんか。同じ長崎の、しかも浦上の人々の真上に、やがて、原爆が落ちるのです」と話題を転換する。

発言はこの後、「焼き場に立つ少年」の写真の紹介、日本が「唯一の戦争被爆国」として核廃絶に邁進していることの宣伝、日本が教皇と同じく平和や自由、人権を推進してきたことの一般的な強調へと続く。

原爆投下や原爆被災に対する認識という観点から安倍発言を整理すると、次の3つの特徴が浮かび上がってくる。

第一に、安倍発言は、カトリック迫害の歴史の説明の後に原爆投下の事実を時系列的に配することによって、そのように明示しないまま、原爆被災が迫害の延長線上にあるとの歴史観を事実上示した。

これは、原爆被災を、現実に関わった浦上カトリックへの最後の大迫害である「浦上四番崩れ」（幕末～明治初期）に続く「浦上五番崩れ」とみる言説である<sup>3</sup>。そうした観点を示した代表的な人物が永井隆であることは、あまりにも有名であろう。

しかし、永井は浦上内部の人間である。彼がそうした言説を展開したのは、原爆被災によって崩壊しかかっていた浦上というコミュニティの「ひび」を埋めるという未来志向の目的意識に根差したものであった<sup>4</sup>。

他方で、浦上の外部からこれと同じ言論が張られた場合は、形式的に同じ中身を持っていたとしても、その政治上の効果はまた異なったものとなる。すなわち、原爆被災を宗教史の文脈にのみ意図的に位置づけることによって、原爆投下が発生した現実政治の流れを人々の意識の中から消去する効果である。

---

<sup>3</sup> 「浦上五番崩れ」言説については、以下を参照。篠崎美生子「『浦上五番崩れ』としての原爆」『原爆文学研究』14号、2015年、pp.169-180。Gwyn McClelland, *Dangerous Memory in Nagasaki: Prayers, Protests and Catholic Survivor Narratives*, Abingdon: Routledge, 2020.

<sup>4</sup> 永井隆、および、彼の浦上燔祭説に関しては多くの文献があるが、もっとも包摂的なものとして、四條知恵『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』（未来社、2015年）を参照。

そのことが、安倍発言の第二の特徴とつながる。それは、広島・長崎への原爆投下の主体がアメリカであったことに触れない、という選択である。安倍は、「同じ長崎の、しかも浦上の人々の真上に、やがて、原爆が落ちるのです」[傍点筆者]と述べて、原爆がまるで自然に空から落ちてきたかのような表現をしている。これは、2016年5月にバラク・オバマ米大統領が広島平和記念公園で行った演説で、「71年前、明るく雲のない朝、死が空から降ってきて、世界は変わってしまいました」(Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed)と述べたことと相似型を成している<sup>5</sup>。

さらに、安倍発言は第三に、広島についていっさい言及していない。原爆といえば一般的には広島でもって代表される傾向があること、フランシスコ教皇が広島・長崎両都市を今回訪問していることから考えると、この不在は一見奇妙に映る。しかし、安倍発言が、原爆被災を浦上の迫害史の延長線上にのみ位置づけることを狙っていたとすれば、広島の消去はむしろ当然の帰結だと言えよう。

そして、安倍発言における広島のこの不在は、フランシスコ教皇の感覚とは、著しい対照をなしている。

### 3. 広島と長崎——フランシスコの見方

フランシスコは、ローマへの帰途、機内記者会見を開き(2019年11月26日)、広島・長崎訪問への感想を記者から求められてこう答えている<sup>6</sup>。

広島は、残虐性に関する真の人間的な宗教教育となるものでした。残虐性。私は、広島  
の博物館<sup>7</sup>を訪問することができませんでした。(集会の)間だけしか滞在できず、大変  
な一日でしたから。ですが、広島は、大変な、大変な出来事であったと言われています。  
国家元首や将軍たちからもらう手紙には、もっとすさまじい惨事が起こりかねないこ  
とが説明されてありました。私にとって、それ[広島訪問：筆者補足]は、長崎よりも  
ずっと心を揺り動かされるものでした。長崎では殉教の問題がありました。私は、通り

---

<sup>5</sup> 長崎で筆者が関わりを持つ被爆者らの間では、爆心地公園にある「原爆落下中心碑」は「原爆投下中心碑」と呼ばれるべきであるとの意見がしばしば出される。柴田優呼はさらに踏み込んで、原爆投下ではなく原爆攻撃と呼ぶべきだと主張している。柴田優呼『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する——隠蔽されてきた日米共犯関係の原点』(作品社、2015年)。

<sup>6</sup> Press conference on the return flight to Rome, 26 November 2019.

[http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco\\_20191126\\_voloritorno-giappone.html](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2019/november/documents/papa-francesco_20191126_voloritorno-giappone.html)

<sup>7</sup> 広島平和記念資料館のことを指していると思われる。

すがりに殉教に関する博物館を見学しました<sup>8</sup>。しかし、広島はきわめて感動的なものでした。そこで私は、核兵器の使用は非道徳的なものであるとあらためて確信しました。それはカトリック教会のカテキズムに加えられるべきでしょう。その使用だけではなく、保有についてもです。なぜなら、保有（を原因とする）事故や、一部の政府指導者の狂気、あるいはある人の狂気によっても、人類を破壊することができてしまうからです。「第四次世界大戦は棒切れと石で戦われることになろう」というアインシュタインの言葉を想起してみるべきです。

このようにフランシスコは、カトリック迫害とは別のラインの問題として、原爆や核兵器の問題を捉えていることがわかる。

したがって、核軍縮という観点から見た場合、教皇の長崎爆心地公園でのメッセージは、広島平和記念公園でのメッセージと一体のものとして理解されねばならない、ということになるだろう。長崎でのスピーチは、核廃絶への条件として人々の相互理解を訴えるものであったが、広島でのスピーチは、「神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういない！ 兵器の轟音はもういない！ こんな苦しみはもういない！」と述べるなど、核兵器の悲惨さをより強く告発するトーンが濃厚であった<sup>9</sup>。

しかし、あらためて繰り返すならば、安倍発言はこの広島と長崎のつながりを切断し、原爆被災を「浦上の殉教者」の物語として提示することにエネルギーを費やしたのである。フランシスコ教皇が、来日日程の初めに長崎訪問を設定したこと、広島よりも長崎で多くの行事——それも宗教行事——をこなし、より多くのメディアの注目を集めたことは、安倍首相と日本政府にとっては好都合であったにちがいない。

#### 4. 覆い隠された教皇と日本政府の立場の違い

こうして安倍首相は、11月25日夜の集いでの発言を通じて、たとえば、

- ・日本政府が、原爆投下の時に至るまで、降伏の決定を遅らせていたこと
- ・戦後の日本が米国の核戦略に組み込まれ、米国の核抑止力をむしろ積極的に支持したこと
- ・核兵器禁止条約に対して教皇とは異なる見解を有していること

などといった、現実の核政治をめぐる諸問題をスキップすることを狙ったと解釈することができよう。

実際、茂木敏充外相は、教皇来日後の会見で、「教皇はスピーチの中で、核抑止力を否定されるような内容もありまして、日本はアメリカの核の傘に入る現実がありますけれども、

---

<sup>8</sup> 西坂公園にある「日本二十六聖人記念館」の見学（11月24日昼）のことを指しているものと思われる。

<sup>9</sup> 広島スピーチについては23-25ページ、長崎スピーチについては20-22ページに、それぞれ全文を掲載。



このスピーチでの受け止めと、発言の影響についてはどのようにお考えになりますか」という記者からの質問に対して、「重く受け止めております」と述べるにとどめた<sup>10</sup>。また、河野太郎防衛相も、教皇来日後にあらためて核兵器禁止条約への態度を問われ、「核兵器禁止条約は、残念ながら現在の安全保障環境をベースにしたものではありませんので、核兵器国、あるいは核の脅威に晒されている非核兵器国、いずれも支持を得られておりません。残念ながら日本としてこれに署名をする考えはありません」と答えている<sup>11</sup>。

もちろん、教皇が来日したぐらいで日本政府の数十年に及ぶ方針がすぐに反転するとは考えがたいし、広瀬論文が指摘するように、フランシスコ教皇の核廃絶のメッセージが今後どれほどの政治的影響力を世界に与えるかは未知数である。

それでもなお、カトリック教界の影響力をまったく無視できるわけでもないだろう。日本カトリック司教協議会は、教皇来日後すぐさま行動に移り、12月12日、核兵器禁止条約の署名・批准を要請する文書を安倍首相に送っている<sup>12</sup>。2018年3月15日に、同様の要請を日本カトリック司教協議会社会司教委員会がすでに行っていたが、今回は、日本のカトリック教界の最高組織である日本カトリック司教協議会の意思として格上げされた形である。

また、米国カトリック司教協議会正義と平和国際委員会も、すでに1993年から核廃絶を訴えていたが、今回のフランシスコ教皇来日を受けた11月25日の同委員会委員長名の声明で、核廃絶へのコミットメントを再確認した。さらに、より具体的に踏み込んで、(2021年に失効することになっている)ロシアとの新STARTの延長が次取るべき措置であると訴えている<sup>13</sup>。

四條知恵によれば、1981年2月に来日したローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が広島で発した「平和アピール」が長崎のカトリックの被爆者らに態度の変容を迫り、それまで比較的沈黙することが多かった彼らが原爆被災について表に出て語るが多くなったという<sup>14</sup>。フランシスコが長崎と広島で今回発したメッセージが、世界の人々に核廃絶に向けた現実の行動を促す潜在力を持つものであったかどうかは、今後の歴史の中で明らかになってくるであろう。それがそうした変化をもたらすものであることを期待しつつ、本稿を閉じることにしたい。

---

<sup>10</sup> 茂木外務大臣会見記録、2019年11月26日。

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/kaiken/kaiken1\\_000072.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/kaiken/kaiken1_000072.html)

<sup>11</sup> 河野防衛大臣閣議後会見、2019年11月26日。

<https://www.mod.go.jp/j/press/kisha/2019/1126a.html>

<sup>12</sup> 「核兵器禁止条約への署名および批准を要請いたします」日本カトリック司教協議会、2019年12月12日。<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/12/23/19915/>

<sup>13</sup> Statement from U.S. Bishops' Chairman of International Justice and Peace Committee on Nuclear Weapons, November 25, 2019. <http://www.usccb.org/news/2019/19-201.cfm>

<sup>14</sup> 四條、前掲書。

## 長崎のカトリック教会における教皇フランシスコ来訪の影響

### 四條知恵

#### 1. はじめに

2019年11月23日から26日にかけて、教皇フランシスコが来日し、東京、そして被爆地、長崎と広島を訪れた。歴史を緋けば、カトリック教会の最高指導者であるローマ教皇が初めて日本を訪れたのは、1981年だった。「空飛ぶ聖座」とも呼ばれた当時の教皇ヨハネ・パウロ二世は、同年2月23日～26日にかけて訪日し、4日間の日程の中で、やはり東京に続き、広島と長崎を訪問している。本稿では、38年前と今回の来訪を比較しつつ、主に長崎のカトリック教会における教皇来訪の影響を考察したい。

#### 2. 教皇来訪をめぐる被爆地長崎の期待

38年前の教皇ヨハネ・パウロ二世の訪日プログラムの中で最も注目を集めたのは、広島の平和記念公園に集まった2万5千人の観衆を前に、全世界に向けて9カ国語で語りかけた「平和アピール」だった。このほか、広島では平和記念資料館を見学した後、「技術、社会、そして平和」という特別講演を行い、世界平和記念聖堂に足を運んでいる。長崎では、浦上天主堂で司祭叙階式ミサを司式し、雪の降りしきる長崎市宮陸上競技場で、5万7千人の会衆を前にミサと洗礼式を行った後、日本二十六聖人記念館、大浦天主堂、聖母の騎士修道院、恵の丘長崎原爆ホームを訪れた<sup>1</sup>。このうち、恵の丘で「長崎の原爆被爆者へのメッセージ」を出しているが、全体として長崎での行動は、宗教的な行事に限定されていた。

今回の教皇フランシスコの訪日においても、短い中に多彩なプログラムが組まれたが、注目を集めたのは、長崎と広島への訪問である。長崎に降り立った教皇は、平和公園（爆心地公園）で「核兵器についてのメッセージ」を出した後、西坂公園で日本二十六聖人殉教者を表敬、長崎県営野球場（ビッグNスタジアム）でミサを執り行った。同日広島に向かい、平和記念公園で開催された「平和のための集い」でスピーチを行っている<sup>2</sup>。前回と今回の来訪におけるプログラム上の大きな違いは、長崎において宗教的な行事に加え、「核兵器についてのメッセージ」を発表したことである。

38年前に教皇ヨハネ・パウロ二世が長崎を訪れた際の報道からは、「夢は今、正夢になり、パーパ様を現実、待ちわびた先祖とともに迎えできる」<sup>3</sup>と、長崎のカトリック界が喜びに沸き立つ様子がうかがえる。一方、長崎県・長崎市は、教皇に平和祈念像前での原爆犠牲者慰霊の献花や核兵器廃絶、完全軍縮、世界恒久平和のためのメッセージの発表などを要

<sup>1</sup> 主婦の友社、カトリック広報委員会監修、『教皇訪日公式記録 ヨハネ・パウロ二世』、1981年。

<sup>2</sup> 「平和のメッセージたずさえ 教皇、爆心地と西坂も訪問予定」『カトリック教報』2019年11月1日・「ローマ教皇、38年ぶりの来日」『カトリック教報』2020年1月1日。

<sup>3</sup> 「WELCOME POPE」『カトリック教報』1981年2月1日。

望していたが、これに対し、長崎大司教区の里脇浅次郎枢機卿<sup>4</sup>は「法王の長崎における行動は、祈りを中心とした宗教行事に限られる」という意向を示した。このことが、「平和メッセージ、献花抜き？」と紙面でも大きく取り上げられている<sup>5</sup>。県、市、マスコミなどの期待は、核兵器と平和に関するメッセージにあったが、長崎における教皇の行動は、バチカンの意向を受けて、宗教行事が主となっており、それに対する失望の声は大きかった<sup>6</sup>。

一方、今回の教皇フランシスコの日本訪問では、ローマ教皇庁が2019年10月2日に発表した主な日程に、長崎の爆心地公園での「核兵器に関するメッセージ」が予定されていた<sup>7</sup>。2013年の就任以降、教皇フランシスコは折に触れて平和と核廃絶について発言してきた。2017年には使用の威嚇も含め、核兵器の開発、保有、使用などのあらゆる活動を禁止する核兵器禁止条約が採択されたが、バチカンは最初に同条約を批准した国の一つである。核兵器については、核兵器禁止条約を評価し、所有自体も非難されるべきという踏み込んだ態度を取ってきた。教皇の訪日の意向が伝えられた2018年から、大阪大司教区の前田万葉枢機卿は、長崎での平和アピールの要請に意欲を示していた<sup>8</sup>。教皇も、同年12月17日の日本司教協議会代表との謁見で「長崎からは核兵器廃絶に関する強いメッセージを発信するつもりです」<sup>9</sup>と述べ、その意向を受け、長崎大司教区の高見三明大司教<sup>10</sup>も「力強いアピールを期待したい」<sup>11</sup>と語っている。日本及び長崎のカトリック教会は、訪日の詳細が発表される前から、長崎における平和アピールを期待していた。

教皇来訪の報道を受け、田上富久長崎市長は、平和を願うメッセージを被爆地長崎から全世界に向けて強く発信してほしいということ、合わせて、2018年7月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたことを念頭に、潜伏キリシタンの歴史の価値に言及してほしいとコメントを出している<sup>12</sup>。このように、当初は観光的な見地からキリシタンの歴史に触れてほしいという声も聞かれたが、詳細な日程と爆心地での「核兵器に関するメッセージ」の発表が報じられるにつれ、被爆地長崎では、特に核兵器廃絶と平和を訴えるメッセージへの期待が高まっていった。

---

<sup>4</sup> 当時の日本カトリック司教協議会会長も務めていた。

<sup>5</sup> 「平和メッセージ、献花抜き？」『長崎新聞』1981年1月15日。

<sup>6</sup> 長崎市による再度のバチカンへの要請を経て、最終的に随行するカザロリ国務長官が教皇の名代として平和公園で献花し、原爆犠牲者の霊に敬意を表すこととなった（「バチカン国務長官が献花 法王名代で平和公園へ」『長崎新聞』1981年2月6日）。

<sup>7</sup> 「平和のメッセージたずさえ 教皇、爆心地と西坂も訪問予定」『カトリック教報』2019年11月1日。

<sup>8</sup> 古瀬小百合、「前田枢機卿 法王に来崎要請へ」『長崎新聞』2018年9月14日。

<sup>9</sup> 高見三明、「教皇訪日のための日本司教協議会代表の謁見」『カトリック教報』2019年2月1日。

<sup>10</sup> 日本カトリック司教協議会会長も務める。

<sup>11</sup> 田賀農謙龍「核廃絶 『力強いアピールを』高見・長崎大司教講演 ローマ法王来崎に期待」『長崎新聞』2019年6月2日。

<sup>12</sup> 長崎市ホームページ、「ローマ法王のご来崎に関する市長コメント」、2018年12月17日  
(<https://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/710000/713000/p032204.html> 2020年1月17日閲覧)。

### 3. 1981年と2019年のメッセージの比較

前回の教皇ヨハネ・パウロ二世来訪時は、初めての訪日ということもあり、新聞はもちろん各種雑誌も『女性セブン』や『プレイボーイ』に至るまで特集を組み、テレビやラジオも先を争って動向を放送した。取材を希望したマスコミ関係者は、海外を含め2,790人に上り<sup>13</sup>、日本各地で「教皇フィーバー」とも呼ばれる熱狂が巻き起こった。それに比べ、今回の来訪は、カトリック教徒や市民の歓迎の声のうちに、落ち着いて進んだ印象である。以下では、1981年の「平和アピール」<sup>14</sup>と2019年の主に「核兵器についてのメッセージ」<sup>15</sup>を比較してみる。

まず、前回は広島平和記念公園のみで「平和アピール」を行ったのに対し、今回は長崎の爆心地公園で「核兵器についてのメッセージ」を発表したことに加え、広島平和記念公園の「平和のための集い」でもスピーチ<sup>16</sup>を行っている。タイトルを見ると、前回の「平和」に対し、今回は「核兵器について」とより対象が絞られている。

1981年の「平和アピール」は、日本語を含め9カ国語で呼びかけられた。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」というよく知られた出だしに始まり、「過去をふり返ることは将来に対する責任を担うことです」という印象的な言葉が、文中で繰り返されている。この中では、広島と長崎を「『人間は信じられないほどの破壊ができる』ということの証」と位置づけ、「広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に対しての責任をとることです」と、原爆被害という過去の出来事をアピールの行われている場所を介し、現在の行動と結び付けている。呼びかける対象は、基本的に「私のメッセージが届くすべてのかたがた」であり、「『この地上の生命を尊ぶ者』は、政府や経済・社会の指導者たちが下す各種の決定が、自己の利益という狭い観点からではなく、『平和のために何が必要かが考慮してなされる』よう、要請しなくてはなりません」と、メッセージを受けた人々に、政府や各界の指導者が平和を考慮した決定をするよう要請する義務が課されている。アピール内で使用されている言葉を数えると、戦争22、核戦争6、核兵器6、平和26である。核兵器については、特に各国の元首、政府首脳、政治・経済上の指導者に対し、「軍備縮小とすべての核兵器の破棄とを約束しよう」と呼びかけている。さらに、この後訪れた長崎の恵の丘長崎原爆ホームでは、被爆したカトリック教徒に対し、

---

<sup>13</sup> 山内継祐、「そして、愛が残った！——教皇訪日エピソード集」コルベ出版社、1984年、19頁。

<sup>14</sup> カトリック中央協議会ホームページ、「教皇ヨハネ・パウロ二世 広島『平和アピール』」、1981年2月25日 (<https://www.cbcj.catholic.jp/1981/02/25/3446/> 2020年1月17日閲覧)。

<sup>15</sup> カトリック中央協議会ホームページ、「教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 核兵器についてのメッセージ 長崎・爆心地公園 2019年11月24日」(<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19818/> 2020年1月17日閲覧)。

<sup>16</sup> カトリック中央協議会ホームページ、「教皇の日本司牧訪問 教皇のスピーチ 平和記念公園にて、2019年11月24日、広島」(<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19823/> 2020年1月17日閲覧)。

「皆さんは絶えまなく語りかける生きた平和アピール」なのだと言かけた<sup>17</sup>。全体として、広島と長崎を「人間は信じられないほどの破壊ができる」ということの証と位置づけ、人間の生命の破壊である「戦争」という概念に目指すべき道としての「平和」を対置し、その中で、「すべての核兵器の破棄」に言及している。

一方で、2019年の「核兵器についてのメッセージ」を見ると、「ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町」と、「核兵器が」とより限定した形で、長崎の町を「証人」と位置づけている。また、核兵器から解放された平和な世界という理想を実現するには、「すべての人の参加が必要」とした上で、核兵器の脅威に対し、「一致団結して具体性をもって」応じなくてはならないと呼びかけた。カトリック教会としては、昨年7月に日本司教協議会が核兵器廃絶の呼びかけを行ったこと、日本の教会が毎年8月に平和旬間を行っていることに触れ、核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、たゆむことなく迅速に行動し訴えていくと決意を示している。政治的指導者に対しては、「核兵器は、今日の国際的また国家の安全保障への脅威に関してわたしたちを守ってくれるものではない」と述べ、人道的および環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考える必要を訴えた。その上で再度、「責務には、わたしたち皆がかかわっていますし、全員が必要とされています」と、私たち自ら主体的に関わることの必要性を強調している。メッセージ内で使用されている言葉の数は、戦争0、核戦争0、核兵器11<sup>18</sup>、平和14である。

加えて、広島におけるスピーチでは、「核兵器の保有はそれ自体が倫理に反する」とした上で、「核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるでしょうか」と核兵器の保有や使用の威嚇についても否定的な見解を出した。また、犠牲者の中には、「異なる言語を話す人たちもいた」などと、被害者の多様性にも言及している。このほか、「若者たち」「次の世代の人々」「現在と将来の世代」「これからの世代」という言葉に見られるように、次の世代を意識した表現も随所に見ることができる。全体として、「核兵器が」とより限定した形で長崎の町を核被害の「証人」と位置づけた上で、「戦争」という概念をより狭く「核兵器」に絞り、「平和」に対置することで、抽象的な「平和」という概念に具体性を持たせ、政治的指導者はもとより、カトリック教会を含め、メッセージを受け取った「わたしたち」に、具体的な行動を求めたものといえる。教皇ヨハネ・パウロII世は、戦争の破壊の証として広島、長崎を語ることに意味を与えたが、教皇フランシスコは、被爆から75年を経て、被爆者の数が減りつつある中で、次世代も意識して具体的な行動を呼びかけた。冷戦体制が維持されていた前回と比べ、世界の核をめぐる状況が質的に異なってきている中で、発効に向けた動きが進む核兵器禁止条約の理念に沿い、核兵器の保有や使用の威嚇についても否定的な見解を出すという踏み込んだ内容になっている。

---

<sup>17</sup> カトリック中央協議会ホームページ、「長崎の原爆被爆者へのメッセージ」、1981年2月26日 (<https://www.cbcj.catholic.jp/catholic/pope/johnpaulii/popeinjp/megumi/> 2020年1月17日閲覧)。

<sup>18</sup> 核兵器禁止条約を含む。

#### 4. 長崎のカトリック教会への影響

教皇フランシスコのメッセージに対し、被爆者団体や平和活動関係者からは評価の声が相次ぎ、田上富久長崎市長も「平和活動を続けてきた被爆者や市民に勇気を与えてもらった。核兵器のない世界を目指す世界の人たちのネットワークを広げていきたい」<sup>19</sup>と発言した。高見三明大司教も、「教皇様の呼びかけを各自が全身全霊で受け止め、具体化に向けて皆で努力したい」<sup>20</sup>と決意を示している。教皇のメッセージは、被爆地長崎のマスコミ、行政、被爆者団体や平和活動関係者、そしてカトリック教会の期待を反映したものだと言える。

被爆後の75年間を振り返ると、長崎のカトリック教会が、核兵器廃絶に向けて積極的な発信をするのは、あたりまえのことではない。かつては、原爆死を神への犠牲と捉え、それによって平和がもたらされたという原爆被害の語り方も見られ、被爆体験を核兵器廃絶という文脈で語るカトリック教徒は少なく、組織としての教会が、積極的に原水禁運動、被爆者運動に携わることはなかった。38年前に当時の教皇ヨハネ・パウロ二世が、「戦争は人間のしわざです」と語りかけたその言葉は、カトリック教徒たちに原爆被害を語ることを促し、教会が組織として反核・平和に取り組むきっかけとなる。ヨハネ・パウロ二世の来訪を機に、長崎のカトリック教会がゆっくりと、原爆被害と核兵器に対する姿勢を変えてきた中に、今回の教皇フランシスコの来訪があった。教皇フランシスコは初のイエズス会出身者であり、戦時中に日本におけるイエズス会の拠点となっていた広島では、後にイエズス会総長となったペドロ・アルペを始めとする複数の会員が被爆している。しかし、教皇は「核兵器についてのメッセージ」を長崎から発信した。今回の来訪は、迫害と殉教の歴史のみに拠らない、カトリック教会における長崎の位置づけの変化を示すものともいえる。

2019年12月12日、日本カトリック司教協議会は、内閣総理大臣に核兵器禁止条約への署名及び批准を要請した<sup>21</sup>。1月18日には、各国のNGOなどが、2020年春に米ニューヨークで開催予定のNPT再検討会議に合わせ、核兵器廃絶などをテーマとする世界大会の開催を呼びかけたことに応じて、『世界大会ニューヨークを成功させる長崎連絡会』結成のつどいが開かれた。同会のよびかけ人には、長崎原爆被災者協議会会長らとともに、高見大司教が加わり<sup>22</sup>、記者会見を行っている。日本及び長崎のカトリック教会は、教皇の来訪を受けて、具体的に動き出そうとしている。

---

<sup>19</sup> 田賀農謙龍「ローマ教皇 来崎 「メッセージは宝物」 爆心地 祈りに包まれ」『長崎新聞』2019年11月25日。

<sup>20</sup> 高見三明「教皇様の呼びかけにこたえよう」『カトリック教報』2020年1月1日。

<sup>21</sup> カトリック中央協議会ホームページ、「核兵器禁止条約への署名および批准を要請いたします。」2019年12月12日 (<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/12/23/19915/> 2020年1月17日閲覧)。

<sup>22</sup> 『世界大会ニューヨークを成功させる長崎連絡会』結成のつどい」チラシ。

## 5. おわりに

長崎のカトリック教会が、一層具体的な活動を展開していくならば、反核・平和に向けた行政及び市民の活動を力強く後押しすることになる。教皇の言葉を受けて、被爆地長崎から核兵器廃絶に向けた気運が高まるのは、歓迎すべきことである。しかし、教皇が長崎の町を「核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町」と発言したことも、記憶にとどめておきたい。長崎が証人であるのは、原爆被害を被ったからである。被爆者の平均年齢が82歳を越え、自らの体験を語ることのできる人が少なくなる中で、被爆にまつわる様々な歴史資料の重要性は増している。核兵器廃絶に向けた行動に注目が集まる一方で、足元を見れば、歴史資料の収集・整理・保存・公開という一連の管理体制の構築が十分ではないために、多くの原爆被害に関わる歴史資料（遺品などの現物資料、写真、映像、体験記、文書資料など）が散逸しつつある。このことは、カトリック関係資料も例に漏れない。教皇の言葉が示すように、長崎の原爆被害とその後の復興に関わる資料は、長崎にとどまらず、日本、ひいては世界的に見ても貴重なものである。長崎の町が、核兵器による被害の「証人」であるために、反核・平和に向けた動きとともに、原爆被害とその後の歴史資料の保存についても、被爆地の具体的な行動を期待したい。

日本訪問前のビデオメッセージ

2019年11月23日～26日

愛する友人の皆さんへ

日本訪問の準備をしている今、友人としてのことばを皆さんにお伝えしたいと思います。わたしの訪問に際して選ばれたテーマは「すべてのいのちを守るため」です。あらゆる人の価値と尊厳を守るという、わたしたちの心に響くこの本能的な強い思いは、現代世界が直面している平和的な共存を脅かす脅威なのです。このことは武力紛争を前に、非常に重要な意味をもっています。皆さんの国は、戦争がもたらす苦しみについて、よく知っています。人類の歴史において核兵器による破壊が二度と行われないう、皆さんとともに祈ります。核兵器の使用は、倫理に反します。また、対話の文化と兄弟愛の文化がもつ重要性も、皆さんはご存じです。とくに、異なる宗教との対話は、隔てを乗り越える助けとなります。人間の尊厳への尊重を促進し、すべての国に全人的な発展をもたらすものです。わたしの訪問が、後退せずに持続する揺るぎない平和へと導く、互いの尊重と出会いという道を皆さんが歩む励みとなることを期待しています。平和は美しいものであり、それが本当の平和なら、失うことのないよう、必死で守るべきものです。さらに、皆さんの国の特徴である美しい自然を見る機会もあるでしょう。わたしたちがともに住む家であり、皆さんの文化において満開の桜に象徴される美しきこの地球がもついのちを、はぐくみ守るという望みをともに表明しましょう。日本訪問の準備に多くの人がかかわっていることを知っています。その尽力に心から感謝いたします。そして、ともに過ごす日々が恵みと喜びのうちに豊かなものとなるよう期待しています。皆さん全員と一人ひとりのために、心を合わせて祈ることをお約束します。どうか、わたしのためにもお祈りください。ありがとうございます。

出典：カトリック中央協議会ホームページ

<https://popeinjapan2019.jp/assets/file/message-translation.pdf>



教皇のスピーチ  
核兵器についてのメッセージ  
長崎・爆心地公園  
2019年11月24日

愛する兄弟姉妹の皆さん。

この場所は、わたしたち人間が過ちを犯しうる存在であるということを、悲しみと恐れとともに意識させてくれます。近年、浦上教会で見いだされた被爆十字架とマリア像は、被爆なさったかたとそのご家族が生身の身体に受けられた筆舌に尽くしがたい苦しみを、あらためて思い起こさせてくれます。

人の心にあるもっとも深い望みの一つは、平和と安定への望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有することは、この望みに対する最良のこたえではありません。それどころか、この望みをたえず試みにさらすことになるのです。わたしたちの世界は、手に負えない分裂の中にあります。それは、恐怖と相互不信を土台とした偽りの確かさの上に平和と安全を築き、確かなものにしようという解決策です。人と人の関係をむしばみ、相互の対話を阻んでしまうものです。

国際的な平和と安定は、相互破壊への不安や壊滅の脅威を土台とした、どんな企てとも相いれないものです。むしろ、現在と未来のすべての人類家族が共有する相互尊重と奉仕への協力と連帯という、世界的な倫理によってのみ実現可能となります。

ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡張競争に反対する声は、小さくともつねに上がっています。軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられています。しかし、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは神に齒向かうテロ行為です。

核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる場所で、数え切れないほどの人が熱望していることです。この理想を実現するには、すべての人の参加が必要です。個々人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核兵器の脅威に対しては、一致団結して具体性をもって応じなくてはなりません。それは、現今の世界を覆う不信の流れを打ち壊す、困難ながらも堅固な構造を土台とした、相互の信頼に基づくものです。1963年に聖ヨハネ23世教皇は、回勅『地上の平和（パーチェム・イン・テリス）』で核兵器の禁止を世界に訴えています（112番 [邦訳60番] 参照）、そこではこう断言してもいます。「軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、真の平和は相互の信頼の上にしか構築できないという原則に置き換える必要があります」（113番 [邦訳61番]）。

今、拡大しつつある、相互不信の流れを壊さなくてはなりません。相互不信によって、兵器使用を制限する国際的な枠組みが崩壊する危険があります。わたしたちは、多国間主義の衰退を目の当たりにしています。それは、兵器の技術革新にあつてさらに危険なことです。この指摘は、相互の結びつきを特徴とする現今の情勢から見ると的を射ていないように見えるかもしれませんが、あらゆる国の指導者が緊急に注意を払うだけでなく、力を注ぎ込むべき点でもあるのです。

カトリック教会としては、人々と国家間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは、神に対する、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、たゆむことなく、迅速に行動し、訴えていきます。昨年7月、日本司教協議会は、核兵器廃絶の呼びかけを行いました。また、日本の教会では毎年8月に、平和に向けた10日間の平和旬間を行っています。どうか、祈り、一致の促進の飽くなき探求、対話への粘り強い招きが、わたしたちが信を置く「武器」でありますように。また、平和を真に保証する、正義と連帯のある世界を築く取り組みを鼓舞するものとなりますように。

核兵器のない世界が可能であり必要であるという確信をもって、政治をつかさどる指導者の皆さんにお願いします。核兵器は、今日の国際的また国家の安全保障への脅威に関してわたしたちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください。人道的および環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考えなくてはなりません。核の理論によって促される、恐れ、不信、敵意の増幅を止めなければなりません。今の地球の状態から見ると、その資源がどのように使われるのかを真剣に考察することが必要です。複雑で困難な持続可能な開発のための2030アジェンダの達成、すなわち人類の全人的発展という目的を達成するためにも、真剣に考察しなくてはなりません。1964年に、すでに教皇聖パウロ6世は、防衛費の一部から世界基金を創設し、貧しい人々の援助に充てることを提案しています（「ムンバイでの報道記者へのスピーチ（1964年12月4日）」）。回勅『ポプロールム・プログレッシオ（1967年3月26日）』参照）。

こういったことすべてのために、信頼関係と相互の発展とを確かなものとするための構造を作り上げ、状況に対応できる指導者たちの協力を得ることが、きわめて重要です。責務には、わたしたち皆がかかわっていますし、全員が必要とされています。今日、わたしたちが心を痛めている何百万という人の苦しみに、無関心でいてよい人はいません。傷の痛みを叫ぶ兄弟の声に耳を塞いでよい人はどこにもいません。対話することのできない文化による破滅を前に目を閉ざしてよい人はどこにもいません。

心を改めることができるよう、また、いのちの文化、ゆるしの文化、兄弟愛の文化が勝利を収めるよう、毎日心をついに祈ってくださるようお願いします。共通の目的地を目指す中で、相互の違いを認め保証する兄弟愛です。

ここにおられる皆さんの中には、カトリック信者でないかたもおられることでしょう。で

も、アッシジの聖フランシスコに由来する平和を求める祈りは、私たち全員の祈りとなると確信しています。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

憎しみがあるところに愛を、

いさかいがあるところにゆるしを、

疑いのあるところに信仰を、

絶望があるところに希望を、

闇に光を、

悲しみあるところに喜びをもたらすものとしてください。

記憶にとどめるこの場所、それはわたしたちをハッとさせ、無関心でいることを許さないだけでなく、神にもっと信頼を寄せるよう促してくれます。また、わたしたちが真の平和の道具となって働くよう勧めてくれています。過去と同じ過ちを犯さないためにも勧めているのです。

皆様のご家族、そして、全国民が、繁栄と社会の和の恵みを享受できますようお祈りいたします。

出典：カトリック中央協議会ホームページ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19818/>

教皇のスピーチ  
平和記念公園にて  
2019年11月24日、広島

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」  
(詩編 122・8)。

あわれみの神、歴史の主よ、この場所から、わたしたちはあなたに目を向けます。死といのち、崩壊と再生、苦しみといつくしみの交差するこの場所から。

ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、なかには、異なる言語を話す人たちもいました。そのすべての人が、同じ運命によって、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました。

この場所のすべての犠牲者を記憶にとどめます。また、あの時を生き延びたかたがたの前に、その強さと誇りに、深く敬意を表します。その後の長きにわたり、身体の激しい苦痛と、心の中の生きる力をむしばんでいく死の兆しを忍んでこられたからです。

わたしは平和の巡礼者として、この場所を訪れなければならないと感じていました。激しい暴力の犠牲となった罪のない人々を思い出し、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じっと祈るためです。とくに、平和を望み、平和のために働き、平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望みです。わたしは記憶と未来にあふれるこの場所に、貧しい人たちの叫びも携えて参りました。貧しい人々はいつの時代も、憎しみと対立の無防備な犠牲者だからです。

わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です。それは、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を世話する能力の著しい欠如、また、あたかもそれで未来の平和が保障されるかのように行われる、継続的あるいは突発的な武力行使などに対する声です。

確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです。これについて、わたしたちは裁きを受けることになります。次の世代の人々が、わたしたちの失態を裁く裁判官として立ち上がるでしょう。平和について話すだけで、国と国の間で何の行動も起こさなかったと。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるのでしょうか。差別と憎悪のスピー

チで、あのだれもが知る偽りの行為を正当化しておきながら、どうして平和について話せるのでしょうか。

平和は、それが真理を基盤とし、正義に従って実現し、愛によって息づき完成され、自由において形成されないのであれば、単なる「発せられることば」に過ぎなくなると確信しています。（聖ヨハネ 23 世回勅『パーチェム・イン・テリスー地上の平和』37〔邦訳 20〕参照）。

真理と正義をもって平和を築くとは、「人間の間には、知識、徳、才能、物質的資力などの差がしばしば著しく存在する」（同上 87〔同 49〕）のを認めることです。ですから、自分だけの利益を求めるため、他者に何かを強いることが正当化されてよいはずはありません。その逆に、差の存在を認めることは、いっそうの責任と敬意の源となるのです。同じく政治共同体は、文化や経済成長といった面ではそれぞれ正当に差を有していても、「相互の進歩に対して」（同 88〔同 49〕）、すべての人の善益のために働く責務へと招かれています。

実際、より正義にかなう安全な社会を築きたいと真に望むならば、武器を手放さなければなりません。「武器を手にしたまま、愛することはできません」（聖パウロ 6 世「国連でのスピーチ（1965 年 10 月 4 日）」10）。武力の論理に屈して対話から遠ざかってしまえば、いっそうの犠牲者と廃墟を生み出すことが分かっているながら、武力が悪夢をもたらすことを忘れてしまうのです。武力は「膨大な出費を要し、連帯を推し進める企画や有益な作業計画が滞り、民の心理を台なしにします」（同）。紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるでしょうか。この底知れぬ苦しみは、決して越えてはならない一線を自覚させてくれますように。真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、「平和は単に戦争がないことでもな〔く〕、……たえず建設されるべきもの」（第二バチカン公会議『現代世界憲章』78）です。それは正義の結果であり、発展の結果、連帯の結果であり、わたしたちの共通の家の世話の結果、共通善を促進した結果生まれるものなのです。わたしたちは歴史から学ばなければなりません。

思い出し、ともに歩み、守ること。この三つは、倫理的命令です。これらは、まさにここ広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあってはなりません。記憶は、より正義にかなない、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための、保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。わけても国々の運命に対し、今、特別な役割を負っているかたがたの良心に訴えるはずで、これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。

だからこそわたしたちは、ともに歩むよう求められているのです。理解とゆるしのまなざしで、希望の地平を切り開き、現代の空を覆うおびただしい黒雲の中に、一条の光をもたらすのです。希望に心を開きましょう。和解と平和の道具となりましょう。それは、わたした

ちが互いを大切に、運命共同体で結ばれていると知るなら、いつでも実現可能です。現代世界は、グローバル化で結ばれているだけでなく、共通の大地によっても、いつも相互に結ばれています。共通の未来を確実に安全なものとするために、責任をもって闘う偉大な人となるよう、それぞれのグループや集団が排他的利益を後回しにすることが、かつてないほど求められています。

神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらぬ！ 兵器の轟音はもういらぬ！ こんな苦しみはもういらぬ！ と。わたしたちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和が来ますように。神よ、あなたは約束してくださいました。「いつくしみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（詩編 85・11-12）。

主よ、急いで来てください。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。平和の君である主よ、来てください。わたしたちをあなたの平和の道具、あなたの平和を響かせるものとしてください！

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（詩編 122・8）。

出典：カトリック中央協議会ホームページ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/24/19823/>

## 教皇のスピーチ

政府および外交団との懇談

2019年11月25日、首相官邸大ホール

内閣総理大臣閣下、  
政府高官の皆様、  
外交団の皆様、  
お集まりの皆様、

まず総理大臣閣下の歓迎のおことばに感謝申し上げます。そして政府高官の皆様と外交団の皆様は、謹んでごあいさつ申し上げます。皆様はそれぞれのお立場において、平和のために、そしてこの崇高な日本という国の人々、および皆様が代表される国々の民の発展のために尽力されていらっしゃいます。わたしは今朝天皇陛下にお会いできたことに大変感謝しております。この新しい（令和という）時代の始まりにあたって、天皇陛下のこれからのご活躍を願い、皇族の皆様、とりわけすべての日本国民に、神の祝福をお祈りします。

バチカン市国と日本の友好関係の歴史は古く、貴国を最初に訪れた宣教師たちが日本に対して抱いた認識と賞賛に根ざすものです。1579年にイエズス会士のアレッサンドロ・ヴァリニャーノが書き残した「わたしたちの神が人間に何を与えたかを見なければ、日本に来て、見ればよい」ということばを思い起こすだけで十分です。歴史的に両国間の交流の機会も多く、その関係を深めてきた文化的、外交的使節の往来があったおかげで、大きな緊張や困難も乗り越えることができたのです。このような交流は両国にとって、政府レベルにおいても有益なものとなりました。

わたしは、日本のカトリック信者の信仰をさらに揺るぎないものとするために来ました。貧しい人に対する愛のわざを、また国民であることに誇りをもつ国に尽くす姿を確認しました。国家として日本は、不遇にある人や障害をもつ人の苦悩に対しとりわけ敏感です。今回の訪問のテーマは、「すべてのいのちを守るため」です。これは、すべてのいのちがもつ不可侵の尊厳と、あらゆる苦難の中にいる兄弟姉妹に連帯と支援を示すことの大切さを認識するという事です。これに関し衝撃を受けたのは、（東日本大震災で）三重の災害に遭われたかたがたのお話をうかがったときでした。被災者の皆様が大変な経験をされ、それによって今も困難な状況におられることに深く心を痛めています。

前任の教皇たちの足跡に従って、神に切に願うとともに、すべての善意ある人に呼びかけます。人類の歴史において、広島と長崎に投下された原爆によってもたらされた破壊が二度と繰り返されないよう、阻止するために必要なあらゆる仲介を推し進めてください。民族間、国家間の紛争は、そのもっとも深刻なケースにおいてさえ、対話によってのみ有効な解決を見いだせること、そして対話こそ、人間にとって唯一ふさわしく、恒久的平和を保証しうる手段だということを歴史は教えています。核の問題は、多国間のレベルで取り組むべきもの

だと確信しています。すなわち、政治的・制度的プロセスを促進することで、コンセンサスとより広範な国際的行動を創造することができるからです。

出会いと対話の文化——これは見識と展望と広い視野があって成り立つものです——こそが、より正義と友愛に満ちた世界を建設するために重要なのです。日本は、教育、文化、スポーツ、観光の分野において、人と人との交流を促進する重要性を理解してきました。それが、平和という建物を強固にする、調和、正義、連帯、和解に大いに貢献することをご存じだからです。その際立った例を、オリンピックの精神に見ることができます。世界中からアスリートが競技に参加しますが、それは、敵対心ではなく、最高のパフォーマンスの追求に基づいてのことです。わたしは来年日本で開催されるオリンピックとパラリンピックが、国や地域を越えて、家族であるわたしたち人類全体の幸せを求める、連帯の精神をはぐくむ推進力になると確信しています。

この数日間に、何世紀にもわたる歴史の中ではぐくまれ、大切にされてきた日本のすばらしい文化遺産と、日本古来の文化を特徴づける宗教的、倫理的な優れた価値に、あらためて感銘を受けました。異なる宗教間のよい関係は、平和な未来のために不可欠だけでなく、現在と未来の世代が、真に公正で人間らしい社会の基盤となる道德規範の大切さを認められるよう導くために重要なのです。今年 2 月にアル＝アズハルの大イマームとともに署名した「世界平和と共存のための人類の友愛に関する文書」の中でわたしたちは、家族である人類の将来のために共有する課題に促され、「対話の文化を、とるべき態度として協働を、方法・基準として相互認識を採択」しました。

日本を訪れる人はだれしも、この国の自然の美しさに感嘆します。この自然の美しさは、何世紀もの間、詩人や芸術家によって表現され、とくに桜の花の姿に象徴されてきました。しかしながら、桜の花のはかなさに、わたしたちの共通の家である地球の脆弱さも想起するのです。地球は自然災害だけでなく、人間の手によって貪欲に搾取されることによっても破壊されているのです。国際社会が被造物を守る使命を果たすのは困難だとみなすとき、ますます声を上げ、勇気ある決断を迫るのは若者たちです。若者たちは、地球を搾取のための所有物としてではなく、次の世代に手渡すべき貴重な遺産として見るよう、わたしたちに迫るのです。わたしたちは「彼らに対し、むなしいことばではなく、誠実にこたえなければなりません。まやかしではなく、事実によって、こたえるのです」（2019 年「被造物を大切に」教皇メッセージ 2）。

この点において、わたしたちの地球を保全するための統合的アプローチは、ヒューマン・エコロジーをも考慮しなければなりません。保全のための責任ある取り組みは、広がりつつある貧富の格差、すなわちグローバルな経済システムにおいて、特権的なごく少数の人が甚だしい富に浴している一方で、世界の大半の人は貧困にあえいでいる、という事実に向かい合うことを意味します。これについて、日本政府がさまざまなプログラムを促進しておられることを存じております。国家間の協働責任の意識を高める啓発を続けてくださるよう励まします。人間の尊厳は、社会的、経済的、政治的活動、それらすべての中心になければなら



りません。世代間の連帯を促進する必要があり、社会生活においてどんな立場にあっても、忘れられ、排除されている人々に思いを寄せなければなりません。わたしは、とくに若者たちのことを考えます。彼らは成長過程でのさまざまな困難に直面して、押しつぶされそうに感じてしまうことも少なくありません。同様に、高齢者や、孤独に苦しむ孤立した人のことも考えます。結局のところ、各国、各民族の文明というものは、その経済力によってではなく、困窮する人にどれだけ心を砕いているか、そして、いのちをはぐくみ豊かにする能力があるかによって測られるものなのです。

訪日が終わろうとする今、今回ご招待を受けたことに、そして心からのおもてなしを受けたことに、またこのおもてなしがうまく運ぶように尽力して下さったすべてのかたがたの寛容さに、あらためて感謝いたします。このような思いをお伝えすることで、これから皆様の努力によって、よりいっそう生命を守り、人類家族すべての尊厳と権利をいっそう尊重する社会秩序が形成されますよう、応援したいと思います。皆様と皆様のご家族、そして国民の皆様に対し、神の祝福が豊かにありますよう祈ります。

ありがとうございます。

出典：カトリック中央協議会ホームページ

<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/11/26/19849/>

## ローマ教皇フランシスコ台下との会談等

令和元年 11 月 25 日

令和元年 11 月 25 日、安倍総理は、総理大臣官邸でバチカンのローマ教皇フランシスコ台下と会談等を行いました。総理は、ローマ教皇フランシスコ台下と会談を行い、その後、要人及び外交団等との集いに出席しました。総理は、要人及び外交団等との集いで次のように述べました。

「フランシスコ・ローマ教皇台下、御列席の皆様、日本政府を代表して、一言御挨拶申し上げます。

教皇台下、日本へ、また総理大臣官邸へ、ようこそお越しくださいました。御訪問を、心より、歓迎いたします。教皇と私は、ただいま、親しく会談をいたしました。

教皇台下には、天皇陛下の御即位に当たって、慶祝の言葉を頂戴いたしました。今朝ほどは、東日本大震災の被災者にも、お会いいただいております。私は教皇のお志に、深く御礼を申し上げます。

教皇は若いころから、来日を強く望まれていたと仄聞（そくぶん）します。そんな台下との出会いを期待し、本日ここには、大勢の方が来てくれました。麻生太郎副総理が、あちらにいます。教皇と同じ、フランシスコの洗礼名を持つ方です。皆さん、意外に思われたかと思います。

さて、教皇をお迎えし、御挨拶を申し上げるに当たって、教皇の数ある一般謁見演説の一つを、取り上げたいと思います。

2014 年 1 月 15 日、バチカンでの演説でした。そこで、教皇は、日本で起きたある歴史的事実に、間接的ですが言及されました。今からおおよそ 150 年前、1865 年 3 月 17 日の出来事です。長崎の大浦という地に、建立なって間もなかった教会を、訪ねてきた人々がありました。男女は子供連れ、総勢十人余り。浦上という地の人々でした。神父、ベルナルド・プティジャン神父がひたすらに祈る様子確かめると、その中から、一人の女性が近づきます。そして、こう訊（き）いた。

『マリア様のお像は、どこですか』

その言葉が、よほど衝撃だったので、プティジャン神父は翌日パリに送った書簡の中に、耳にした日本語そのままを、ローマ字にして書きつけました。

『Sancta Maria no gozowa doko』

日本からカトリック神父が一人残らずいなくなって、その時まで約 220 年。筆舌に尽くし難い迫害の中、信仰を守り続けた忍従の人々がいたことが、明るみに出た、奇跡の瞬間でした。扶（たす）け合い、励まし合って生き延びた共同体には、ある教えが伝わっていたといえます。

『7代待てば、海の彼方から司祭が来る』

この時まで、本当に7世代もの長い間、仲間の結束を保ち、信仰を守り抜いたレジリエンスは、時と空間を宗教の違いを超えて、我々の魂を今も、揺さぶらずにはいません。

しかしながら、歴史とは、苛烈ではありませんか。同じ長崎の、しかも浦上の人々の真上に、やがて、原爆が落ちるのです。

一枚の、写真があります。ところは、長崎近郊のどこか。時は、1945年、原爆が炸裂（さくれつ）した後の、恐らく夏から秋に変わる頃です。写っているのは、10歳くらいの男の子です。その背中に、力なく瞑目（めいもく）しておぶさるのは、年下の弟のようです。少年が裸足で、直立不動、気をつけの姿勢で立つ、その場所は、焼き場なのです。おぶった幼な子は既に命が絶えていて、彼はその子を、土へ返しに来たのです。

この写真を教皇は、カードにされた。『唇は、噛（か）み締め続けたせいで、血をにじませている。この子の悲しみを表すものといったら、ただそれだけだった』と解説を加え、『戦争がもたらすもの』という言葉と署名を付して、広く配布されました。昨日、長崎でなされた祈りの場でも同じ写真が使われています。

私は、言葉を失います。原爆がもたらした、悲しみと、苦痛の重みに。それを思いやり、大きな心を寄せてくださる、教皇の、祈りの深さに。日本とは、唯一の戦争被爆国として、『核兵器のない世界』の実現に向け、国際社会の取組を主導していく使命をもつ国です。これは、私の揺るぎない信念、日本政府の確固たる方針であります。私たちはこれからも、核兵器国と非核兵器国の橋渡しに努め、双方の協力を得ながら、対話を促す努力において、決して倦（う）むことはない、ここに申し上げます。

フランシスコ教皇台下。戦後70有余年、日本の私ども、平和と、自由をひたぶるに追い求め、揺らぐことがありませんでした。国連難民高等弁務官だった、今は亡き、緒方貞子さんが世に広めたのは、人間一人ひとりを強くし、未来に希望を抱けるようにすることこそが、最も大切だとする思想です。これを信じ、信じるのみでなく行動で示す若者たちを、日本は育て続けてまいりました。このことは、私始め、多くの日本国民が、誇りとするところです。今、この瞬間にも、青年海外協力隊の諸君は、世界各地の、最も貧しい地域に入り、活動を続けています。持ち前の粘り強さで、マラリヤに罹（かか）ろうとも、貧しい人、弱い立場の人、女性や、子供たちに、希望を与えようと、努力を惜しまぬ若者たちです。

他方、私たちが平和を享受する今このときも、迫害にあえぐ人がある。理由もないまま囚われの身となり、解放を待ちわびる人々があります。教皇が、『Proteger toda vida』、つまり『全ての命を守ろう』と言われたように、このような絶望の淵（ふち）にある人々の、ただ一人として私たちは、見捨ててはならない。自由を尊び、人権を重んじる私たちは、希望の光が見えず、絶望しか見出せない人々を、必ず、救い出さなくてはならないのです。

貧しい人、恵まれない人々に常に寄り添い続ける教皇の姿を近くに拝見し、私もまた、世

界をより良き場所とするため、たゆまず前進してまいりたいと、決意を新たにしています。  
教皇の言葉から、一つ引用させていただくことで、挨拶を終えようと思います。

『課題は、克服するためにあるのです。現実を直視し、しかし、喜びを失うことなく、大胆に、希望に満ちて、献身しましょう』

御清聴、ありがとうございました。」

出典：首相官邸ホームページ

[https://www.kantei.go.jp/jp/98\\_abe/actions/201911/25vatican.html](https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201911/25vatican.html)

## 著者紹介（執筆順）

### 吉田 文彦 (YOSHIDA, Fumihiko)

センター長・教授

1955年京都府生まれ。東京大学文学部卒、朝日新聞社入社。2000年より論説委員、論説副主幹。その後は、国際基督教大学（ICU）客員教授、米国のカーネギー国際平和財団客員研究員、笹川平和財団常務理事など経て現職。

### 広瀬 訓 (HIROSE, Satoshi)

副センター長・教授

専門は国際法、国際機構論。国連開発計画（UNDP）プログラム担当官、ジュネーブ軍縮会議日本政府代表部専門調査員、宮崎公立大学教授等を経て、2012年より現職。

### 山口 響 (YAMAGUCHI, Hibiki)

客員研究員

Journal for Peace and Nuclear Disarmament（J-PAND、長崎大学発刊）編集長補佐。1976年、長崎県生まれ。一橋大学大学院修了（社会学博士）。現在、長崎大学・長崎県立大学・活水高校で、非常勤講師として核や原爆の問題について教える。

### 四條 知恵 (SHIJO, Chie)

長崎大学多文化社会学部客員研究員

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程修了。博士（比較社会文化）。専門は原爆被害の歴史と表象。広島平和記念資料館学芸員、日本学術振興会特別研究員を経て、現所属。

**Research Center for Nuclear Weapons Abolition,  
Nagasaki University(RECNA)**  
長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA)

---

**1-14 Bunkyo-machi, Nagasaki, 852-8521, Japan**  
〒852-8521 長崎市文教町1-14

---

**TEL. +81 95 819 2164 / FAX. +81 95 819 2165**  
**[E-mail] [recna\\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp](mailto:recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp)**  
**<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp>**